（様式８）

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（学術）	氏名	HENG KRENG
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

A STUDY OF STUDENT ACHIEVEMENT IN THE FIRST-YEAR OF UNIVERSITY IN CAMBODIA USING MULTI-LEVEL MODELING

論文審査担当者

主　　査	広島大学大学院国際協力研究科	准教授	堀田 泰司	印
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	教授	黒田 則博	
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	教授	吉田 和浩	
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	教授	馬場 卓也	
審査委員	東京大学大学院教育学研究科	准教授	北村 友人	

〔論文審査の要旨〕

本論文は、カンボジアではまだ実証事例の少ない高等教育における学力向上に影響する学生自身の学習行動や教員の教育行動の要因を統計分析を用いて特定することを目的とした実証研究である。カンボジアでこれまで行われてきた多くの調査研究は、現地の高等教育機関で見られる制度や教育現場の現象と傾向の測定であった。それに対し本研究は、カンボジアの都市部にある９大学において９００名以上の被験者をランダムに抽出し、それらの学生の学力測定を単独で実施し、そして学生の学習行動並びに教員の教育行動の要因についてアンケート調査でデータ収集し、大掛かりな定量的分析を行った。さらに分析の手法に、個人、クラス、そして大学の３層構造間の詳細な関連性を相対的に分析する階層的線形モデル(HLM)を用いて、従属変数である学生の学力と独立変数である学習行動並びに教育行動の因果関係を論証した。

第１章では、問題の所在、本研究の目的と重要性、そして、３つの研究課題と研究方法の概念、さらに論文全体の構成について説明した。第２章では、カンボジア高等教育の歴史的背景を概観し、特に 1989 年以降の民主化並びに近代化が高等教育改革に及ぼした影響について言及した。90 年代の民主化とともに欧米諸国からの援助による教育改革は、その後の高等教育の普及・発展に大きく貢献した。97 年には、私立大学の設置が可能になり、大学数は、2000 年の 10 校から 2013 年には 100 校以上に急増した。しかし、それは同時に、高等教育全体の教育の質をさらに悪化させる状況を生み、現在、学力の低下が深刻な課題になっており本研究の意義を再確認した。次に第 3 章では、(1) 学習行動が学力向上に及ぼす要因と (2) 大学並びに教員の教育活動が及ぼす影響の２つの視点から、先行研究の文献調査を行い、それらの文献の論点を整理し、本研究の理論的枠組みの形成に至るまでの経緯について概説した。

第４章では、本研究に使用した統計分析の手法、研究対象、そしてサンプリングの手法とアンケート調査並びにインタビューの質問票作成の根拠について説明した。本研究は、英語の初年度教育を事例に、プノンペン近郊の９校の高等教育機関に在籍する述べ約 923 名の学部１年生を対象に英語の試験を実施すると共に、学生に家庭環境、教育経験、そして、授業中や自宅での学習態度、

さらに教員の教育行動についてアンケート調査を行った。さらに、一部の学生と教員には、教授法に関するインタビューを行い、アンケート調査結果の妥当性を確認した。分析方法としては、アンケート調査で得られたデータは、主に学生の過去の学習環境と自発的な学習態度、そして教員の学習支援に向けた教育行動の３つの要因に分け、因子分析と重回帰分析を行い、さらに学習行動並びに教育行動の要因を学生間、クラス間、大学間の３層に分け、階層的線形モデル(HLM)による分析を行った。

第５章では、学力の向上への学生の学習行動と教員の教育行動の影響に関して調査結果をまとめた。第１に学力の向上に影響した学生の学習行動は、授業参加、授業準備、宿題・課題が影響していることが明らかになった。しかし、同様の分析をクラス・大学間で比較した場合は、その影響はクラスや大学によって傾向の開きが大きく、授業参加だけが個人、クラス、大学間のすべての階層分析で有意差を証明した。また、学習行動の影響については、大学間で影響の度合いが異なり、学力向上への大学の特性の影響が重要であることが判明した。さらに、今回のカンボジアでの事例研究で見られた特徴としては、欧米諸国では、一般的に学生同士による共同学習や教員とのクラス外での学習や指導の影響は大きいのに対し、今回の調査では全体的にその影響力の有意差は見られなかったと報告している。しかし、男女間や学力別のグループ間、そして出身地（都心・地方）の異なる学生間では影響の違いが見られ、授業参加でも学力別並びに出身地別のグループ間では違いが見られた。

第２に、教員の教育行動の影響としては、教員による励ましやフィードバックの影響が階層別、グループ間の比較分析でもすべてに共通する学生の学力向上に影響する重要な要因であることが判明した。教員の影響では、先行研究の多くが教員の授業の計画力や授業中の説明力、そして、学生の学力に対しチャレンジングな難易度の高い授業の影響を認めているのに対し、カンボジアの今回の事例研究では、そうした有意差が見られなかったのも一つの特徴といえると論じている。そして終章である第６章では、全体のまとめと今後の研究計画について言及し、カンボジアの高等教育機関における英語教育を事例に大学が提供する授業や教員による学習活動への支援の重要性を論じた。

本研究論文に関して、審査員全員が（１）対象としたサンプル数が大きく、カンボジア都市部の高等教育における学生の学習態度・環境と学力向上の関係を把握するのには、十分である、（２）データは、統計的に３層構造の関係を相対的に分析・検証されており、信頼性が高い、（３）研究テーマ並びに課題は、カンボジアの高等教育の質に直接関係したものであり、それを定量的分析によって科学的に証明しようとした試みは、これまでの先行研究と比べ独創的であり重要な研究であるということを認めた。また、予備審査で指摘された一部の論旨の再構成や終章における調査結果の原因に関する分析も加筆されたので、審査委員会は、本論文が学位請求論文として充分であると判断し、全員一致で合格とした。